

～Pasesa の使用体験～
臨床から見た動脈硬化指標API高値群と
低値群の臨床像の比較

林 滋

血栓症化学研究所・林クリニック

【目的】

Pasesaによる上腕動脈の硬化度の測定ではAPI値がASIやCAVIと相関が認められているが、ASIは測定値の変動が大きく、CAVIは中高年齢者や高齢者の動脈硬化の測定に優れている結果がえられた。今回API値が臨床的にいかなる意義を有しているのか再検討を行った。

【方法】

対象は外来通院中の動脈硬化性疾患患者(n=179)でAPI高値群と低値群に分けて臨床データにどのような差が見られるか検討を行った。測定項目は身長、体重、BMI、AVI、API、CAVI、IMT、ABI、D-dimer、血小板凝集値、血液生化学検査。

【成績】

APIは15-50の値を示し、mean \pm SDは34.1 \pm 8.2でmedianは34だった。API42以上を高値群(H)23以下を低値群(L)とした。H群はn=31、L群はn=24で、男/女比はそれぞれ1/30、14/10でH群で圧倒的に女性が多かった。年齢はH群75歳、L群67歳で、体型はH群がL群よりも小さくて痩せていた。H群とL群で有意差の認められた項目はLDL-C、Cr、CRP、PI Aggre、身長、体重、AVI、ASI、PP(Pulse Pressure)であった。両群で基礎疾患の差ははっきりしなかった。

【考案】

APIは動脈硬化度を反映してはいるが、体型や性差が見られることより上腕の脂肪や筋肉量といった因子が影響を与えている可能性も否定できないと考えられた。